

---

# バイバイ・ドール

xSORAx

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バイバイ・ドール

### 【Nコード】

N3410U

### 【作者名】

XSORAX

### 【あらすじ】

オリジナル、完全ド下手小説です。

主人公はビビリ

女子その1は割と元気な幼馴染っぽいキャラ

男子はチャラ男

女子その2は無口なかわいい子

そんな4人組でお送りするおふざけ？

シリアス？ロマンティック？

だいぶ気分で決める行き先不明の小説です！

「おめでとつございますあなたは」

へろへろで情けない小説ですが読んでいただけただけなら幸いです。  
よろしく願います。

No.0 ～ここからはじまりますよよよ～

はじめましてなのかな？

君の顔を見るのが初めての気がするからそう言ってみたがもし違  
つたら謝るよ。

僕は「この世のすべてを見守る者」

いわば世界の傍観者。あくまで見るのが役目で助けたりはできな  
いんだ。

だから君に何を言われても助けることもできないし助けるつもり  
もない。

だって君にはなんの義理もないしね。  
なにより神様に怒られちゃうんだ。

さて、そんなわけで君はここに来たわけだけど、何か用かい？

え？気が付いたらここに來ていた？

…なるほど、神様もなかなか意地悪なことをするもんだ。

まあ、ついでだし君もみていくかい？

ある男の話を……

桜が満開に咲くころ、この物語の主人公「よしの・はるひと吉野春人」は高校3年  
生になり

新学期がスタートすることになった。

「この学校はどのような条件なのかはわからないが、かなりの限られた条件で

なければ入ることのできない、いわば優等生学校なのだ。

しかも、この学校は自分が入ろうと思って入ることができない。ある日いきなり、こんな手紙が来るのだ。

『 吉野春人様へ

おめでとうございます、貴方はわが校の生徒になれる資格を手にすることができました。

つきましては貴方のすべてのものをわが校がいただく代わりに貴方の一生の生活をわが校が保証いたします。

住所は・・・・・・・・・・』

といった手紙がくるのだ。

しかもその手紙は家に来るのではない。入っているのだ。学校の下駄箱に。

これだけでも胡散臭さ満点なのにしかも手紙が来た時期が2年の一学期の後半、夏休みの3週間前だ。

更に言うところの手紙には拒否権というものが無いらしい。手紙にはこんなことも書いてあるのだ。

『・・・・・・・・この手紙の内容を他人に話したり、手紙を破る、この資格を拒否するといった行為が

こちらのほうで確認されますと、貴方はわが校の敵とみなしすべての力を使いまして責任を取っていただきますので絶対にそのようなことが無いようお願いします』

・・・・怖いじゃないか、ビビるじゃないか。

そう思った春人は自分の財布と携帯だけを持ち書いてあった住所に向かった。

書いてあった住所はそこまで遠い場所ではなかった。

電車で40分とまあ決して近いわけではなかったのだがまあ自分が学校に通う距離に比べたら

大した距離ではなかった。

その住所につくと春人はまず驚いた。

そこには城壁というにふさわしい壁がそびえたっていたのだ。

しかもその城壁は春人の目で確認することが不可能なくらい広く長くつながっていた。

駅を降りたすぐ目の前に入口があったため、迷うことはなかったが、胡散臭さが倍増されたのは間違いない。

しかもまたその入口の扉が巨大でどうやってあけるのか悩むほどだった。

春人はその入口で入学手続き（書類や荷物の確認があったため、ほぼ入国手続きみたいだった）を済ませ、例の巨大な

扉を開けてもらうことに成功した。

扉の先には、街が広がっていた。

学校じゃない、街だった。

と、かなりインパクトのある新生活だった

が、しばらくするとそれも慣れてしまうのであった。

俺が転校してからもうすぐ一年になるのだが、今ではかなり溶け込んでいるのであった。

一つ気になっていることは両親のことだが、元々ウマも合っていなかったし、入学手続きの時に

すでに連絡が行っているらしく、時々気になるのだが大丈夫だろうと思っっている。

春といえばクラス替え。毎年の楽しみと思うやつもいるだろう。だが、そんなものはない。何故ならクラスが一つしかないからだ。よって、また今年も同じクラスの連中と仲良くやるのだ。

・・・と、いうことはまたあいつと席が「・・・あいつって私のことかな？」

うん、そのとおり！とは言えなかった。何故なら目が怖いから。こいつの名前は永吉春日<sup>ながよし・かすが</sup>。身長は156cmぐらい。

髪の毛は茶髪のボブの毛先にゆるいウェーブがかかっている。

性格は朗らかといえば聞こえはいいが一歩間違えばそれはアホの部類に入るわけで。

ちなみにこいつとは入学の時期が被つたらしく、同じクラスの連中には『ハルハルコンビ』とバカにされた。

最初はかなり嫌がっていたが今では慣れてしまい、なんとも思わない。

それは春日も同じらしく、最近では軽く受け流している。

「・・・いえ、チガイマスヨ？」

やべ、片言になってしまった。

「もお・・・私だつてコンビって言われるの未だにちょっと嫌なんだからね・・・」

まあ、今年一年となりなわけだしよろしくね」

若干ふてくされながらも最後は笑顔になるそんな春日はクラスの連中にも学校の男子にも

人気があるらしく、告白する奴が後を絶たないらしい。

だがしかし、どんなにイケメン野郎が告白してもバツタバツタと切り倒すのが春日の謎なのだが・・・

そんな事を思っていると、いきなり肩を組まれ耳のすぐ横から声が聞こえた。

「相変わらず仲のいいことで。そんなだからコンビとか呼ばれるんだよ」

とニヤニヤしながらしゃべりかけてきたこいつは『野川慶彦』のかわ・よしひこ。

身長は俺よりでかく175cmぐらい、色グロな感じで髪の毛は金色に近いオレンジ。

性格的には普段はふざけた感じなのだが、いざというときは頼りになる兄貴的存在だ。

慶彦の腕を振りほどきながら俺は軽く睨み答えた。

「コンビじゃねーってのに。せめて仲間内では呼ぶなっつての」

そう、俺達は仲間というくりにふさわしい仲である。

なにをするにもいつも一緒にいるようなそんな仲だ。

俺、慶彦、春日ともう一人女の子で仲間と他の人にも呼ばれている。

後、変なあだ名は付いていない。

「ホントだよ、正直つらいっすよお」

と、謎な体育会系な語尾をつけて春日も反対した。

「・・・ホント、ばかだね」

後ろから声が聞こえた。

三人ともかなりびくっとなり振り向いた。

「・・・驚きすぎ」

「いや、驚くよ？完全に気配消えていたからね？」

慶彦の言う通り、完全に気配というものがなかった。本気でビビった。

この気配ゼロのこの女の子は川永未来かわなが・みく。

身長は春日より小さく、150cm。

黒い髪の毛を腰の位置まで伸ばしており、左側だけみつあみに編んでいる。

先ほども言ったように気配というか存在感がないらしい。

言葉はあまり発しないのだが言うことはずばずばして重たいものがある。

そしてかなりの美人さんで、こやつも人斬りの異名を持ち、ばっさばっさしている。



先ほど言った、仲間の4人目だ。

「・・・そういえば」

「なにかあったの？未来ちゃん？」

思い出したかのように未来が言葉を発した。

どうやら今日は全校集会があるらしい。

「そうなのか、ならいくか」

その言葉をいい俺は体育館に向かった。

体育館に向かうともうそろそろ集会がはじまるというところであった。

俺達は足早にいつもの所定の位置についた。ていうかなんかおかしい。

おかしいよね？紅白の壁に張るやつ（名前はなんだったっけ？）の色が黒と赤なんだぜ？

それじゃあ葬式のグロイバージョンじゃない？

怖いじゃん、ビビるじゃん・・・

どうやらそれは他の連中も一緒らしく、かなりきよるきよるしている。

そうこうしているうちに、集会が始まった。

あーだこーだ話しているうちに校長先生のお話になりました。

そして、俺が最っ高にビビる一言目を校長先生が言いました。

「みなさんおめでとーございます。貴方達は死にました！そして生き返るチャンスを得ました！」

な、ビビるだろ。ていうか死んだって・・・え？

**№. 〇. 〇 ～ ここからはじまりますよよよ～ (後書き)**

はい、さいごまでありがとうございました。

この物語はここから始まります。

これからもよかったですらよろしく願います。

小説の評価などよかったですら願います。

できればやさしく、やわらかく願いますw

NO.1 この世界のルールのなにか (前書き)

見るその前に、ツールが使えない謎・・・  
見にくくなっている可能性が大！

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！

ていうかもとからみにくかったら

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！

## NO.1 この世界のルー尔的なにか

さて、ここまで見てくれたってことは続きが気になるってことだね。

まずはお礼をしようか。ありがとう。

上手く見せれるかわからないけども、見てくれたらたすかるよ。

え、僕の性別？性別なんかもうとくに概念を捨てただけだね。  
一応僕は女性というものに位置付けられているようだよ。

そろそろはじめようか、君もみたいだろうか？

「あなたは死にました！そして生き返るチャンスを得ました！」

「・・・え？」

どういうことだろう？

私、永吉春日こと春日ちゃんは全校集会で集められた後そんなびつくり告知をされた。

どういうことだろう、え、私死んじやったの？

ていうかいつですか？どこですか？

せんせー、私大事なところがわかりませんよー！！

「詳しくは入学のときに渡した手紙の封筒を一枚の紙に戻してめくっていただければわかりますのでよろしくお願いします」

校長先生は極めて冷静な感じで淡々としゃべっていた。

ていうより先生たちは死んでいる私たち（私は信じないぞ！）をな  
んで見れるんだろ？

せんせー、割とどうでもいいかもだけどわかりませんよー！

「はい、そうですね、意味がわかりませんよね。

あー、その君、ちょっとおいで」

と、私を指さした。

え、私の質問答えてくれるの？

実はパイプ椅子に座っていた私は立ち上がった。

わかってると思うとみんな座っているんだからね？

「あー君じゃないよ、その前」

おっと私じゃないのね。恥ずかしいじゃないの。

私の前の人は立ち上がりステージに向かった。

その子がステージに上るとキョロキョロしながら校長先生の話の聞こうとしている。

よくみたらちよっと青ざめていない？かわいそー！

「どうなるかわかりませんよね？ではやってみましょうか」

その子が青ざめ具合マックスになったところで校長先生が話し始めた。

「アンラッキーですね、あなた。また来世で逢えたらいいですね・・・」

『バイバイ・ドール』

パチンと校長先生がしゃべったあとになりました。

そしたら・・・

その女の子の体中に刀がグサグサと刺さりまくっているんですよ。え・・・なに、あれ・・・

「キヤーーーーー！！」

そりゃ叫ぶでしょ、ていうか普通はあればらばらだよな。

うえ、気持ち悪・・・吐きそうです、はい。

「これが君たちが死んだ証拠です」

その刀の内2本をもち抜いては刺し抜いては刺し。

惨殺というにふさわしいほどにその行為を繰り返した。でもその子は立ち尽くしたまま、動かなかつた。内臓出ているのに血の一滴も出ない。

やばい・・・本気で吐きそう。

のど元までこみ上げる吐き気。

止まれ止まれ・・・。

ちよつと、隣の人はいくのやめてよ・・・

やばい、ごめんなさい・・・春日はもうだめです・・・

「むりすんな、吐きたければ吐け」

その声の主は春人だった。

そしてその手にはビニール袋。

その言葉に安心したのか私は吐いた。吐きまくった。  
あ、春人の手が震えている。やはり彼も怖いのだろう。  
基本彼はビビりですからね。

吐き終わった後、私は春人の体にしがみつinaながら立ち上がった。

私、絶対臭いよ。吐いた後だもん。恥ずかしいな。

「ごめんね、ごめんちゃん」

にかつと笑ったつもりでいた。私、ちゃんと笑えてる？

春人は苦笑いながらも笑顔でこう言った。

「俺も吐いた。そして臭い」

殴りました。言うまでもありません。

「痛い！でも臭い！」

春日は怒りました！ぼっこだよぼっこ！

でも我慢。助けてもらっただし。

「つたく、未来ちゃんと慶彦くんは？」

春人とちよつと距離を置いて春人に話し始めた。

「未来は気絶。慶彦は未来を保健室」

殴った場所をさすりながら春人はしゃべった。

「皆さん、おちつきましたか？それではこれで全校集会を終わります。  
詳しい話は手紙で確認してください。教員はすべて受け付けませ

るのでご了承を」

校長先生は体育館を出て行った。

先ほどの女子生徒は春人の話ではあの後塵となって消えたらしい。成仏ですかね？死んでるんだし。

そのままその日の学校は無しになった。気分も晴れぬまま私たちは帰ることになった。

ちなみに私たちの寮は一緒なんです。

なんでって？学年毎に分けられる寮だから全員一緒なんだよって。全員が部屋に入学時の手紙があるとのことで各自確認した後、見せられる内容だったら確認とのこと。

どちらにしろ、一度未来ちゃんの部屋に集合らしい。

ちなみに発案者は未来ちゃん。頭が切れるからね、彼女は。

私は自分の部屋に戻った。とりあえずお風呂に入ろう。

お湯を新しくはりかえて・・・音楽をかけて・・・そして入る！

実は私、ためながら入るのが好きなんです！

風邪をひくとか何だか知らないけど私は大好き！愛しているといつても過言ではない！

・・・とか何とか言ってる間に寝てました。

やばいよー、みんなから3件ずつ電話入ってるよー！

いかなきゃ・・・っとその前に。

確認するんだよね。確か。



私は手紙を乗り白をはいだ後、紙が電気代の料金みたいになつてるところを確認して

はいでみた。(あ、これってゲームとかのコマンドみたいじゃない?)

そこには・・・

『あなたは選ばれました。これからは4人ひと組で必ず行動してください。メンバーは任意です。』

蘇生の選考の仕方は貴方がたに戦っていただく必要があります。

戦い方はランダムです。肉弾戦、銃撃戦、その他もろもろ。

戦いは4人ひと組で戦い、剣道の戦いのように4戦それぞれ一人づつ

戦っていただき、先に3本先取したほうが勝ちです。

2対2になつた場合、ランダムで選ばれた一人が最終戦を行っていただきます。

そこで勝つたチームが勝者となります。

この戦いは最後の1チームになるまで行われます。

そして、この4人が蘇生の権利を得ます。

携帯に戦いのメールが届くのでそれを確認後、こちらが指定した場所で戦っていただきます。

なお、指定した時間、場所につくことが一人でも

できなかつた場合その時点で失格、退場です。

以上のことを気をつけ、頑張っていたくださいと思います。

この面の裏側に貴方の死因が書いてあります。よろしければ確認ください』

私の死因か・・・なんかいやだけどわからないままじゃ、いやだしな。

私は、知らないままは嫌な夕子なのだ。  
私はその紙をペリっとめくった。

『貴方の死因は

首つり自殺です』

・・・うん、みなかったことにしよう。

今の時間を確認する。12時5分前。

眠い・・・携帯を確認。

メールが来てる。2時間前だけど。

知らないアドレスからメールが来ている。

『MISSION!』

というタイトルのメールが来ている・・・

メールを確認してみる。

『12時までには4人組を組んで一つの部屋に入ってください』

・・・えー今は12時5分前。

しくじったら私は成仏。

やばいやばいやびあい！

私はあわてて部屋をとびだ・・・せなかった。

「・・・ばかやろう」

未来ちゃんがいた。そして怒られた。

「いーから早く入れ！」そして慶彦くんが春人をおぶいながら部屋に飛び込んだ。

そして気がつく驚愕の事実。私バスタオル1枚。

はずいやん、やばいやん。

「・・・春日、服」

未来ちゃんがすかさず言ってきた。

でも男の子がいるからバスタオルを外すのがいやん。

「俺は壁側向いてるから着替えちゃいなよ」

ささつと壁側を向いた慶彦君。よし確認しました。

私はバスタオルを外した。

春人は私の布団で寝ている。部屋に行ったら寝ていたらしい。

かぎがあいていたので連れてきたとのこと。

ふとん、いーにおい、しますか？

まあわかりませんよね、そーですよね！

私は春人が寝ている布団のほうを向いた。

靴下をはいて、ぱんつを「・・・順番、変」

未来ちゃんがぼそつと言った。

あ、そうなの？私はいつもこうだけどね！

パジャマのズボンにあしを通した後、上着を着ようとした。

「・・・な！！！！私は寝ています、えー寝ていますとも！」

目の前の寝ている春人が寝ていると口がしゃべっていた。

グーパンですよ。ぼっこですよ。

時計が12時を回った。

その時、メールが鳴った。4人同時にだ。

メールを確認したのだ！

『MISSION CLEAR!』

「どつやら、ひほあんしんのようだ」  
口が軽く腫れている春人がしゃべった。

「・・・役、どつやらひとあんしんのようだ」  
未来ちゃん、役はいらぬよ。

とりあえず、あんしんしていいようだ。

よかった・・・

私は急に眠くなってしまった。

みんなに別れを告げ、今日は寝ることにしました。

MISSION NO. 1 『チームをくめ!』 CLEAR!

NO.1 この世界のルー尔的なにか (後書き)

微妙な終りになってしまっま。

ゆるしてください！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3410u/>

---

バイバイ・ドール

2011年10月9日06時04分発行